

FOMCを控えて様子見ムードが強い中、中国の輸入鈍化が投資家心理を冷やす

2010年8月10日(火)

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

米追加金融緩和への思惑から欧米株は反発

欧州株式市場はFOMCの追加緩和期待からエネルギー関連株等が上昇し、大幅反発となりました。また、好調な経済指標も追い風となりました。6月の独貿易黒字は141億ユーロと前月（98億ユーロ）より大きく増加し、予想（120億ユーロ）も上回りました。輸入が前月比+1.9%であったのに対して輸出は+3.8%と伸び率が大きく、ユーロ安がドイツの輸出の追い風となっていることが窺われる内容でした。

米国株式市場もFRBがFOMCで超低金利政策の長期化を示唆するとの思惑等から買いが優勢で、3日ぶりに反発しました。全セクターが上昇する中、特に金融、ハイテクなどが相場上昇を牽引しました。また、小売チェーン大手株の7月の既存店売上高が好調であったことから、一般消費財も堅調でプラスに寄与しました。

為替市場ではFOMCでの追加緩和を見込んでドル売り・円買いの動きが一部で見られたものの、株高等を背景にドル指数や米国債利回りは3日ぶりに反発しました。

中国の景気鈍化懸念が投資家心理を冷やす

日経平均株価は欧米株高等を受けて堅調に始まりました。半数以上の銘柄が上昇する中、上昇率上位には証券をはじめ、景気敏感株が並びました。上昇を牽引したのは電機セクターで、海外市場での対ドルでの円高一服等を背景に、買戻しの動きが広がりました。半数以上の銘柄が上昇し、日経平均株価は一時+100円近く上昇する場面がありましたが、9,650円を上回る水準では上値が重くなりました。

前引け後に発表された中国の7月の輸出総額は前年比+38.1%と単月で過去最高を更新し、予想（+35.0%）も上回りました。ただし、前月（+43.9%）と比べて伸びは鈍化しました。また輸入総額は同+22.7%と予想（30.0%）を下回り、4ヶ月連続で伸び率が低下しました。輸入鈍化に伴い中国の貿易黒字は1年半ぶりの水準まで上昇し、市場では中国景気の成長鈍化を懸念する見方が広がりました。中国株が下げ幅を拡大する中、為替市場では円が全面高となり、日経平均株価は後場寄りでも9,600円を割り込みました。朝方堅調だった輸出関連株もマイナスに転じてほぼ全面安となり、一時9,505円まで下落する場面もありましたが、この水準では押し目買いが入り、結局、日経平均株価は▲21円安の9,551円と小幅安で引けました。

日銀は金融政策決定会合で、無担保コール翌日物の誘導目標金利を現状の0.1%に据え置くことを決めました。新型オペの供給額も現状を維持し、景気判断も据え置きました。内容は想定範囲内であったことから市場の反応は限定的でした。市場の関心は今晚のFOMCに集まっています。先週末の米雇用統計を受けて、FRBによる追加金融緩和観測が広がり、住宅ローン担保証券（MBS）償還資金による米国債等の追加購入や、準備預金金利の引き下げ（現行の0.15%→0%へ）等、何らかの緩和策が採られるとの思惑が広がっています。株式や債券市場では追加金融緩和への期待が既に織り込まれつつあり、何らかの対策が打ち出されない場合、株式市場に失望感を与える可能性があります。ただし、その場合は為替市場でドル売り・円買いの巻き戻しも予想されることから、日本株の下値は限定的にとどまる可能性も考えられます。

以上